

認知症ケア OJT の意義と課題 ～意識調査を通してわかったこと～

大崎町 介護老人保健施設 サンセリテのがた

発表者: 下ノ堀 愛 (介護職)

共同演者: 春別府稔仁(医師) 宮崎千鶴(准看護師) 山口翔平(作業療法士)

橘拓真(作業療法士) 鈴木誠(介護福祉士) 小重夏恋(介護福祉士)

川畑綾香(介護福祉士) 伊藤千里子(介護福祉士) 塚野咲(介護職)

南野朝成(介護職) 新留巨樹(臨床心理士) 竹元康博(社会福祉士)

【はじめに】

当施設は認知症専門棟 50 床(総数 100 床)を有しており、認知症ケア委員会を中心に法人全体で認知症ケアの実践に取り組んでいる。主な活動は施設内研修の開催、新入職者研修で、認知症ケアの基本事項の習得を目指している。

【問題と目的】

認知症介護に職員間で差があることは把握しており、定例研修はそのため実施しているが、委員会が思うほど参加数は増えず、認知症介護の質の差は参加頻度の差であると思っていた。だがこれまで、研修機会の提供が職員の認知症対応の理解向上や定着にどのように影響するのかは確認していなかった。そこで、新入職者研修を受講した職員を対象に意識調査を実施し、定例研修を含めた研修参加による理解度の変化を調べ、効果的な研修のあり方を考察した。

【調査内容】

認知症の疾患としての理解やケアに関する調査票を作成した。内容は①疾患と特徴、②見当識障害の説明、③BPSD と具体例、④ケアのポイント、⑤なじみの関係・環境の意義の説明、⑥BPSD のケアのポイント、⑦在宅生活の問題点と対応で、自由記述形式で行った。

【調査方法】

1. 対象 H26 年 4 月 1 日～H28 年 5 月 31 日の間に入職した職員 20 名。
2. 期間 H27 年度、H28 年度の新入職者研修の前後に配布回収し実施。H29 年に準監視下で再実施。
3. 分析方法 調査票回収後、各項目の回答を、評価できるものを 2 点、やや評価できるものを 1 点、無回答や評価できないものを 0 点とし、文章で回答する項目は 7 点を最高点として評価する(総点 62 点)。比較方法は新入職者研修前と後、研修後と H29 年を行う。また、定例研修への参加頻度で 3 群に分けて群間比較を行い、また各群において研修後と H29 年(6～12 ヶ月後)とを比較し、t 検定を行った。

【結果】

新入職者研修前の平均点は 38.9 点、研修後は 48.9 点で 10 点以上増加し、有意差が認められた。H29 年の平均点は 38.8 点と研修前とほぼ変わらず、研修後平均点との有意差が認められた。

次に定例研修の参加頻度で分けた 3 群では、H29 年の各平均点は 2 回以上参加群 49.0 点、1 回参加群 37.4 点、不参加群 28.5 点となった。各群間では、2 回以上参加群と 1 回参加群、1 回参加群と不参加群でいずれにおいても有意差は認められなかったが、2 回以上参加群と不参加群では 20 点以上の開きがあり、有意差が認められた。また、各群において新入職者研修後と H29 年で比較すると、2 回以上参加群では、研修後の平均点は 51.5 点で、H29 年の 49.0 点は微減であり、有意差は認めないものの、2 回以上研修に参加することで効果を確認できた。1 回参加群では、研修後の平均点は 48.7 点で H29 年の 37.4 点より 10 点以上減少し、有意差が認められた。不参加群では研修後の平均点は 46.1 点で、H29 年の 28.5 点と比べ明らかな減少が見られ、有意差が認められた。1 回参加群・不参加群ともに、定例研修の参加不足が理解低下を生じていることが認められた。

【考察】

新入職者研修により理解の向上が見られたが、半年から 1 年半の時間が経てば研修をしていないのと変わらないことが分かった。職員を定例研修の参加頻度で群分けしたところ、研修に参加している群は理解定着していることが検定上確認できた。また、参加機会が少ない程、理解低下は顕著であった。長期的にみると、1 回の研修では理解の定着は図れないことが分かった。

新入職者研修参加のみで知識の定着を期待することは難しく、継続的に定例研修に参加する働きかけが必要である。そのためには、研修テーマ別にカリキュラムを組むなどして選択研修制を導入したり、定例会不参加群に対する別の対応方法を設定する必要もあると考える。また、今回の調査結果を職員に示すことで定例研修の重要性を訴え、継続した研修機会を提供し、職員の認知症ケアのスキルアップを図っていきたい。